「人生 100 年時代における
公民館の役割について」

答　申

福生市公民館運営審議会

令和５年２月

目次

はじめに 1

１　アンケート調査の背景と概要 2

２　アンケート結果の分析 2

３　各項目間の関係性解析 4

４　各分野からの分析 7

（１）サークル活動者としての課題やニーズ 7

■　公民館本館利用者の視点から 7

■　松林分館利用者の視点から 10

■　白梅分館利用者の視点から 14

（２）音楽活動等における居場所・世代間交流について 17

■　音楽活動等を通して人々の居場所となる公民館　その１ 17

■　音楽活動等を通して人々の居場所となる公民館　その２ 19

（３）学校・高齢者施設の現場からの視点から見た公民館との連携や課題について 21

■　学校を視点とした公民館との連携及び課題 21

■　高齢者施設の現場からみた公民館との連携及び課題 24

（４）学びの場と地域での活躍の場について 26

■　公民館の学びの場の未来に寄せて　その１ 26

■　公民館の学びの場の未来に寄せて　その２ 28

５　人生 100 年時代における公民館の役割について 32

（１）これからの公民館が向かうべき方向について 34

（２）公民館・職員の力量形成について 35

（３）ICT などへの対応と一定区域内の学習支援の展開 36

執筆者一覧 38

資料 39

資料１　人生 100 年時代における公民館の役割について（諮問） 40

資料２　答申作成にかかる活動記録 41

資料３　答申作成のためのアンケート（調査票） 42

はじめに

第26期福生市公民館運営審議会（以下、公運審という）は、令和４年７月に福生市公民館長より諮問「人生100年時代における公民館の役割について」を受け、公民館利用者にアンケートを行い、その結果と現在および今後の公民館を取りまくであろうと考えられる様々な社会状況を踏まえ、答申を作成することとした。

公民館活動では、住民同士が「つどう」「まなぶ」「むすぶ」ことを目的にしているが、それらは人と人が出会う従来からの対面での活動を前提として行われてきた。しかし福生市公民館も開館以来40年以上が経過し、その間に少子高齢化、若年層利用者の減少、価値観の多様化、ICT技術の飛躍的発展などの社会的変化が起こった。また予測不能なコロナ禍などにも見舞われ、今後の公民館活動においては、従来の対面形式だけでは十分でない社会になったことが明白に感じられるようになった。またSociety5.0やマルチステージ化、リスキリング、学び直しなどの社会構造の変化が流れとなって到達し始めたことも感じられるようになった。

人生100年時代ともなれば現役活動期間も長くなり、現在の利用者が、自らこれらの流れや変化を経験する可能性も高くなるであろう。また大きな影響を受けている今回のコロナ禍と同様な不測の事態が発生することも否定出来ない。そのような状況に迅速に対応するには、現在の活動・利用状況に加え、利用者が日頃どのように考え、どのように行動するかを把握し、事前に対応しておくことが非常に重要となる。

よって、これらの流れや変化に対する公民館の機能と役割の方向性を描き出すため、Society5.0やマルチステージ化などの社会構造の変化に対する利用者の考え方もアンケートにて問うものとした。

第26期福生市公民館運営審議会
委員長　石井　和夫

１　アンケート調査の背景と概要

福生市公民館長より、令和４年７月 21 日付け「人生 100 年時代における公民館の役割について」の諮問を受け、８月１日から公民館３館（福生市公民館、松林分館、白梅分館）で、公民館利用サークルごとにアンケート用紙を手渡しで配布し、８月 31 日まで延べ１ヶ月間で 553 のアンケート用紙を回収した。

このアンケートの目的は、福生市公民館長からの諮問に応えるべく、公民館利用実態の把握と分析するためである。

今回のアンケート調査実施の背景には、令和２年１月以降の新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、対面集合型といったこれまでの公民館の利用と学習スタイルが一時的ではあったが公民館の休館（閉館）により継続できなかったことから、ICT の利用により非対面・非接触という学習やコミュニケーションスタイルも生まれ、大きく変化したことがある。

また、今後 20 年先まで予想されている少子高齢人口減少社会、IoT（Internet of Things の略）、ロボット、AI などの先端技術をあらゆる産業や社会生活に取り入れ、経済発展と社会的課題の解決を両立する Society5.0 と呼ばれる日本社会と経済の方向性が示されている。さらに「人生 100 年時代構想会議」で人生 100 年時代を見据えた経済・社会システムを実現するため、政策のグランドデザインの検討がされていることから、社会・経済・私たちの暮らしのデザインが変化していくことが想定できる。

これまでの公民館利用のあり方の単なる延長の議論では、時代の変化に対応できる新たな公民館の機能と役割、社会教育の位置づけや公民館事業と学習支援の方向性を見誤る危惧が予想されることから、公民館利用者の一人ひとりの声を聴き見据えるために行った。

２　アンケート結果の分析

今回のアンケート結果からは、実態の概要が以下のように把握できた。

公民館利用の年代は女性の利用が７割を超え、利用実態として 60～80 歳代が８割以上を占めている。近隣自治体からの利用もあるが市民が中心の活動拠点となっている。サークルの活動年数は 70%が 10 年以上で、参加者も 38%以上が 10 年以上という、非常に高い数値が見られる。このこと自体は、福生市公民館のこれまでの普遍的な学習支援効果が大きいと考えられる。

そして個々のサークル活動の内容から、リーダーや仲間の存在が大きいこと、コロナ禍での公民館利用で仲間と会うことの重要性が再認識されたこと、現在の趣味や学習を続けたい、現在の活動を仲間と継続したい、しかも対面での活動を求めていることが判明した。

今後の公民館に期待する役割についても、いつでも誰でも立ち寄れ、賑わいを感じられる場づくりが求められ、学習情報の入手方法については広報ふっさがSNSなどより圧倒的な支持があった。

以下に、各項目での分析を示す。

全回答数 553 のうち利用館別回答数は 527 で、内訳は福生市公民館 165（31.3%）、松林分館 176（33.4%）、白梅分館 186（35.3%）であった。

性別回答数は 473 で、女性 336（71.0%）、男性 137（29.0%）であり、圧倒的に女性の割合が高い。年齢別回答数 505 で、70 歳代が 219（43.4%）で一番多く、60～80 歳代 424（84.0%）であり、公民館の利用実態として 60～80 歳代が８割以上を占めていることがわかった。

次に、市内からの利用者と市外からの利用者の回答数は 481 で、市内 386（80.2%）である。羽村市、あきる野市、昭島市、立川市といった近隣自治体からの利用者がいる。（なお、市内・市外を記述しない割合が高いので、利用者全体から市内利用者を示すものではない）

活動内容の回答数は 513 で音楽が 140（27.3%）で、工芸 47（9.2%）と続いている。しかし、今回のアンケート用紙に自分の活動が該当しないとした割合が 21.8%もあることから、音楽が多いことは変わりないが、他の活動内容が低調ということは言えない。

サークルの活動年数に関して回答数は 517 で、10 年以上が 366（70.8%）で、個人の活動年数の回答数は 524 で、10 年以上が 201（38.4%）である。このことから、福生市公民館利用者は、サークル自体も個人も長い取組みをしていることがわかる。

サークル活動のきっかけは回答数 513 で、同じ趣味・活動仲間との会合の場として利用が 286（55.8%）である。継続理由については回答数 778 で、仲間との語らいが楽しいから 284（36.5%）となっている。サークル活動の重要性については、回答数 558 で「やや重要」が 275（49.3%）、「なくてはならない」が 206（36.9%）であり、各自の生活の中にサークル活動が位置づいていることがわかる。

サークル活動が楽しい理由は回答数 522 で「仲間と一緒に話しをしているとき」が 162（31.0%）、「新たな知識の獲得や新たな気づきをしたとき」が 135（25.9%）で仲間との学びが楽しさにつながっていることがわかる。そして、各

自が参加しているサークルの魅力については回答数 515 で、「指導者やリーダー、仲間がすばらしい 」が 231（44.9%）、「趣味として無理なく続けられる」が 204（39.6%）となっており、リーダーや仲間の存在が大きいことがわかる。

コロナ禍前と後でのサークル活動の変化には回答数 490 で、少し変わった 210（42.9%）、ほとんど変わらない 136（27.8%）であった。少し変わった・大きく変わった合計は 282（57.6%）である。そして変わった内容の回答数 235 で、活動中止から再開したことが 140（59.6%）であることから、コロナ禍で仲間と会えなくなり、サークルの活動再開が大きな喜びであることがわかる。

コロナ禍での公民館利用で困ったことの回答数は 391 で、「声を出して動く・歌う・おしゃべり・仲間との飲食ができなくなった」が 225（57.5%）と他を大きく引き離している。活動の内容だけではなく、仲間と会うことの重要性がわかる。

コロナ禍を経験して何をどのように学びたいかは回答数 1004 で、「現在の趣味や学習を続けたい」が 419（41.7%）、「やはり、対面での学びや話し合う場と機会が欲しい」141（14.0%）となっている。現在の活動を仲間と継続したい、しかも対面での活動を求めていることがわかる。

今後の公民館に期待する役割の回答数は 709 で、「いつでも誰でも立ち寄れ、賑わいを感じられる場づくり」が 343（48.4%）で、「初めて公民館を利用しようという人への取組みを充実してほしい」が 107（15.1%）である。やはり、人という存在による賑わいのある場が必要ということがわかる。

学習情報の入手方法についての回答数は 508 で、広報ふっさ 305（60.0%）、公民館だよりなどの印刷物 83(16.3%)、福生市役所ホームページ 62(12.2%）、フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなどの SNS は 31（6.1%）、職員や友人からの口コミ 32（6.3%）となっている。

60～80 歳代が多数を占める利用実態から考えてみると、やはり ICT ツール利用による学習情報収集が一般的となるには、まだ時間がかかりそうな印象がある。

３　各項目間の関係性解析

アンケート調査結果のデータについて有意差があるか否かを検討するため、一部カイ二乗検定による判断をした部分がある。しかし、数字上の問題と考える視点も重要なため、特に数値が微妙な領域の場合、他の検定を行う必要もあると考え、この解析結果に依存して結論付けることは避けている。また、このアンケ

ート調査結果が全てではないことも勘案し、あくまでも参考として位置付けたい。

下記に、項目ごとに性別に差があるか否かを検討し、その後、利用者全体としてのいくつかの項目による有意差判定による解析結果を見出した。

各項目間の関係性の解析においては、男性と女性との間で有意差が認められるのは、コロナ禍を経て女性に体調に不安を持つ割合が高いことが判明した。これは、女性の利用割合が 70%を超えていることから、高い数値は予想ができた。特に仲間との触れ合いの減少といった精神的な面が類推できるが、以下の結果では仲間と共に過ごす時間や場が重要であることがわかる。単なる公共空間を用意すれば良いということではなく、仲間との学習や交流空間が求められていることと、新型コロナウイルス感染症による厄災が、数値として明確になっていることにも注目できるのではないだろうか。

■サークル活動継続理由とコロナ後で学びたい関係

Q7サークル継続理由とコロナ後で学びたい関係

	仲間との語らい	現在の継続	合計
男性回答者数	40	116	156
女性回答者数	111	276	387
合計	151	392	543

期待値

	仲間との語らい	現在の継続	合計
男性回答者数	43.38	112.62	156
女性回答者数	107.62	279.38	387
合計	151	392	543

数式　0.474184462 ⇦有意差なし　性別に関係無

■サークル利用のきっかけとコロナ後で学びたい関係

Q6 サークル利用のきっかけとコロナ後で学びたい関係

	公民館主催事業	現在の継続	合計
男性回答者数	18	116	134
女性回答者数	58	276	334
合計	76	392	468

期待値

	公民館主催事業	現在の継続	合計
男性回答者数	21.76	112.24	134
女性回答者数	54.24	279.76	334
合計	76	392	468

数式　0.297086414 ⇦有意差なし　性別に関係無

■サークル活動の重要度（なくてはならないと回答者）とリーダーや仲間の関係

Q8 個々人にとってなくてはならないとサークルの魅力の関係

	なくてはならない	リーダーや仲間	合計
男性回答者数	49	45	94
女性回答者数	145	169	314
合計	194	214	408

期待値

	なくてはならない	リーダーや仲間	合計
男性回答者数	44.70	49.30	94
女性回答者数	149.30	164.70	314
合計	194	214	408

数式　0.310939116 ⇦有意差なし　性別に関係無

■体調に不安とサークルの趣味の継続選択者との関係

Q８(体調に不安)とQ10（サークルの魅力趣味の継続）の関係性

	体調に不安	趣味の継続	合計
男性回答者数	12	60	72
女性回答者数	66	138	204
合計	78	198	276

期待値

	体調に不安	趣味の継続	合計
男性回答者数	20.35	51.65	72
女性回答者数	57.65	146.35	204
合計	78	198	276
数式	0.011040442	⇦有意差あり	性別が関係有

■体調に不安とコロナ禍での孤立の関係

Q8体調に不安とQ15 コロナ禍後に新たな人間関係を求めているのか

	体調に不安	コロナ禍と孤立	合計
男性回答者数	12	16	28
女性回答者数	66	35	101
合計	78	51	129

期待値

	新たな人間関係	コロナ禍と孤立	合計
男性回答者数	16.93	11.07	28
女性回答者数	61.07	39.93	101
合計	78	51	129
数式	0.03126578	⇦有意差あり	性別が関係有

■コロナ禍で公民館利用が少し変わった回答とサークル退会者との関係

実測値　Q11コロナ禍で少し変わったとサークル退会者との関係

	少し変わった	退会者	合計
男性回答者数	130	26	156
女性回答者数	148	50	198
合計	278	76	354

期待値

	新たな人間関係	コロナ禍と孤立	合計
男性回答者数	122.51	33.49	156
女性回答者数	155.49	42.51	198
合計	278	76	354
数式	0.050793586	⇦有意差あり	性別が関係有

■コロナ禍で変わった回答者とコロナ禍で困ったことの関係

実測値　Q13コロナ禍で変わったとQ14 コロナ禍で困ったこと

	少し・大きく変化	仲間との交流	合計
男性回答者数	156	61	217
女性回答者数	184	154	338
合計	340	215	555

期待値

	少し・大きく変化	仲間との交流	合計
男性回答者数	132.94	84.06	217
女性回答者数	207.06	130.94	338
合計	340	215	555
数式	3.8181E-05	⇦有意差なし	性別に関係無

■コロナ禍で変わった回答者とコロナ禍後の新たな出会いとの関係

実測値　Q13コロナ禍で変わったとQ15 コロナ禍後の学びで新たな出会い

	少し・大きく変化	③新たな出会い	合計
男性回答者数	156	20	176
女性回答者数	184	58	242
合計	340	78	418

期待値

	少し・大きく変化	③新たな出会い	合計
男性回答者数	143.16	32.84	176
女性回答者数	196.84	45.16	242
合計	340	78	418
数式	0.001092705	⇦有意差あり	性別が関係有

■コロナ禍で変わった回答者とコロナ禍後の社会的貢献の関係

実測値　Q13コロナ禍で変わったとQ15 コロナ禍後の学びで社会貢献

	少し・大きく変化	⑤社会的貢献	合計
男性回答者数	156	16	172
女性回答者数	184	35	219
合計	340	51	391

期待値

	少し・大きく変化	⑤社会的貢献	合計
男性回答者数	149.57	22.43	172
女性回答者数	190.43	28.57	219
合計	340	51	391

数式　0.051576541 ⇦有意差あり　性別が関係有

■コロナ禍で変わった回答者とコロナ禍後の新たな学びの関係

実測値　Q13コロナ禍で変わったとQ15 コロナ禍後の学びで新たな出会い

	少し・大きく変化	⑦ITの学び	合計
男性回答者数	156	7	163
女性回答者数	184	18	202
合計	340	25	365

期待値

	少し・大きく変化	⑦ITの学び	合計
男性回答者数	151.84	11.16	163
女性回答者数	188.16	13.84	202
合計	340	25	365

数式　0.082591155 ⇦有意差なし　性別に関係無

（公民館運営審議会委員　伊東　静一）

４　各分野からの分析

（１）サークル活動者としての課題やニーズ

■　公民館本館利用者の視点から

福生公民館も開館以来 40 年以上が経過し、公民館を取り巻く社会環境も変化して公民館活動への影響が日々大きくなっている。その変化とは、高齢化、コロナ禍（不測な社会状況の発生）、ICT 化、人生 100 年時代（健康長寿社会の到来）、マルチステージ化、Society5.0、リスキリング等である。最近までは高齢化が盛んに議論されていたが、現在ではこのような数多くのファクターが影響する時代になって来ている。

そこで今回のアンケートから、サークル活動者として課題・ニーズの検討を行い、更に提案を行うこととする。

（ア）社会環境の変化と公民館活動に対するその影響と課題

公民館活動に影響するファクターと、活動者が実際に感じているその影響と課題について今回のアンケート結果から読み取ってみる。

表４－１　　社会環境の変化とその影響、課題

社会環境の変化	関係するアンケートと結果	影響、課題
１．高齢化	問　１　年齢　　全人口 アンケート　年齢別比率 20 歳代　1.4%　8.8% 30 歳代　1.4%　10.1% 40 歳代　4.3%　11.2% 50 歳代　5.9%↑低い　14.3% 60 歳代　24.1%　13.7% 70 歳代　43.3%　12.0% 80 歳代　16.6%　7.5%	全人口年齢別比率に比べ、アンケート結果の 50 歳代以下の参加者の比率は明らかに低い。これは<u>高齢化で参加者が少なくなったのではなく、若年層の参加が大きく減っていることを示している。</u>（全人口の年齢別比率は、令和４年住民基本台帳による）
２．コロナ禍	問 11　コロナで活動が変わったか 変わらない　14% 殆ど変わらない　28% 少し変わった　43% <u>大きく変わった　15%</u>	大きく変わった人が 15%だから、それ以外の 85%はそれほど変わらず活動が出来たと考えられる。しかし<u>実際はほぼ全員に影響があった。これはどういうことか。</u>
３．ICT 化	問 13　問 11 のコロナで活動が少し変わった（43%）、大きく変わった（15%）人の変わった内容 活動中止、再開　60% メンバーがやめた　33% <u>インターネット使用　7%</u>	「少し変わった」と「大きく変わった」が全体の 58%のため、各回答の全体での比率は ⇒60% x 58%＝35% ⇒33% x 58%＝19% ⇒ 7% x 58%＝ 4% となる。<u>インターネットの使用は低い（全体で 4%）。</u>

４．人生100年時代	問1 年齢 アンケート結果 40歳代　4.3%　50歳代　5.9% 60歳代　24.1%　70歳代　43.3% 80歳代　16.6% （50歳代以下は本当に少ない）	人生100年時代と言えば、寿命が延びて公民館活動に充てられる時間も増えそうである。但し就業年齢も高くなっており、70、80歳代での活動開始は難しいのではと思われる。
５．マルチステージ化 Society5.0 リスキリング	問15　コロナ後の学習 現在の趣味や学習を続ける　41.8% 問16　公民館への期待 気軽に立ち寄れる公民館　49.0% （各問の第一位の回答）	マルチステージ化等は、社会経済を維持・発展させるための社会の変化・流れと思われる。但しアンケート結果は、それらとは違った人とのつながりに基づいた「趣味、学習、気軽に立ち寄れる」を要望している。

（イ）課題の検討と提案

前記（ア）で確認した課題の検討とその対応、及び提案を行う。

表４－２　　課題に対する対応、提案

社会環境の変化と課題	課題に対する対応、提案
１．高齢化 ＜課題＞ 若年層の参加が大きく減っている	アンケート回答者中、50歳代以下の方(73人)に若年層参加者の減少要因、要望、改善策などを直接伺ってみることを提案する。社会状況、就業状況、価値観などは大きく変化しており、実際の意見・考え方をベースにしなければ解決策は出ないであろう。利用者連絡会でメインテーマとして取り上げ、具体的な対策案について検討されることを提案する。
２．コロナ禍 ＜課題＞ 殆どのサークルで影響を受けた	コロナへの対応が明確に分からなかったため、緊急事態宣言により全ての活動が中止となった。このことにより対策が必要な特定のサークルだけでなく、対策が必要でないサークルまでも活動に影響を受けた。緊急事態宣言中は公運審も定例会が中止になり、打開策の検討が大きく遅れた。現在ではWi-Fiが導入されてリモート定例会が可能になったが、コロナ発生時にリモートで打ち合わせが可能であったら、検討会を行うこ

	とで影響を少しでも軽減できたと思われる。コロナ禍がほぼ全てのサークル活動に影響したのは、対面活動時間が少ないとしても、ほぼ全てのサークルで対面を前提に活動が行われており、それが制限されて何もできなくなったためと考える。対面活動時間が少なく、日頃から電話や携帯などで連絡を取り合っていれば、コロナ禍の影響は少なかったであろう。よって今後は、必ずしも対面を必要としない活動はリモート、対面は必要な時とするハイブリッドな運用も検討しておくべきである。公民館も、今後予想される震災などにおいても活動の継続が可能な方法について検討・開示すべきと考える。尚、少し時間は要したが Wi-Fi 導入によるリモート定例会開催は大きな前進であった。
３．ICT 化 インターネットの使用率低い	問 13 の現在のインターネット使用率は 7%と低いが、上記２項のようにリモート通信が行えることは大きなメリットであり、ICT 化推進、外部への情報発信の早期実現を提案する。若者参加増加にも有効。
４．人生 100 年時代	寿命が延びても公民館活動に参加する年齢が上がり、70、80 歳では活動開始は難しいと思われる。その前から「公民館デビュー」のような講座を対面、リモートで行い、ハードルを下げられることを提案する。
５．マルチステージ化 Society5.0 リスキリング	マルチステージ化、Society5.0、リスキリング等の新しい流れと、公民館活動者の求める「人とのつながりを求めた趣味、学習、気軽に立ち寄れる居場所」は、目指す方向が少し異なっていると感じられる。よって新しい流れを公民館の目的と現状に基づいて分析・解釈し、公民館活動者が求めている方向との融合を実現されることを提案する。

（公民館運営審議会委員　石井　和夫）

■　松林分館利用者の視点から

現在では、少子高齢化人口減少社会、ICT 化、人生 100 年時代のマルチステージ化、コロナ禍による不測の事態発生等で公民館を取り巻く環境が大きく変化している。そのような中で今回の「人生 100 年時代における公民館の役割につ

いて」の諮問を受け、現状、課題、解決策などをアンケート結果から考えてみる。

（ア）年齢別利用者の実態

公民館の利用者は、近年高齢化していることが明らかであるが、アンケート結果でもわかるように、60～80 歳代が 84%となっている。その中で活動年数が 10 年以上継続しているサークルもあるが、そういったサークルのメンバーも同様に継続しており、会員の入れ替わりも少ない。その為、全体的に年齢層が高くなる傾向がある。同時に、指導者の年齢も上がり、このままではあと 10 年もすれば、サークルの存続にも影響があると思われる。子育て世代の 40～50 歳代の利用者も全体の 10%程度、30 歳代以下は４％と少ない。核家族化が進み、共働きの世帯が増えたのも会員が増えない要因ではないだろうか。定年後の 60 歳代以上でも仕事を続けている人も多く、なかなか自分の時間を持てないことも考えられる。男女比も７：３と女性の利用者が圧倒的に多いが、男性も定年後の新しい出会いや居場所を求めて公民館を訪れる人も増えている。

（イ）サークル活動の実態

サークルに入会してからの経年数、所属年数はともに 10 年以上が最も多く、これからも長く活動されるよう公民館からも利用者に大いに働きかけて頂きたい。新しいサークルも立ち上がっているが、数は少ない。傾向としては講座の後にサークル化することが多いようだ。

私の所属する書道サークルも、松林分館の主催講座「初心者書道教室」に参加したことがきっかけで自主サークル化した一つだ。参加者の年齢層もまちまちで、40～80 歳代、20 名程で講師の先生は 80 歳代。講座終了後にこれからも楽しく書道を続けたいという思いからサークルを発足させた。発足から今年で９年目となる会も、私も含め当時からの会員も数人残っている。９年の間に会員の入れ替わりや講師の交代などを経て存続している。全盛期は 30 名以上の会員が在籍したことがあったが、現在は 16 名で活動している。やはり高齢化と共に健康上の理由などで会員の減少が止まらない。新しく入会する会員も若い世代はおらず、60 歳代以上の入会が多い。他のサークルでも話を聞くが、若い人の入会者がおらず、活動自体ままならなくなり消滅してしまったサークルも少なくない。

以前は松林分館でも子育てサークルが沢山あり、私も子どもと一緒に所属していたが、今は一つも残っていない。少子化もあるが、保育園へ預けて働く母親も多く、サークル自体が存続できなくなった。現在も公民館で保育室併設講座を

開催しているが、子どもを預けての講座なので、子どもと一緒に活動するサークルには結びつかないようだ。

松林分館には利用者交流会という組織がある。平成 14 年に正式な会則が出来てから 20 年になる。この会は「松林分館を利用するサークルが自主的に相互連絡の場や情報交換を通じて、私たちの松林分館の活動をよりスムーズにするとともに、より良い活動の場に育て上げ、利用者が地域の人々との輪を広げていくこと」を目的としている。

利用者交流会には各サークルの代表が出席し、年６回定期交流会が開催されているが、毎回の出席者も少なく役員のなり手がいない。発足当時に比べ関心が薄れていた。そこで数年前より全登録サークルを４グループに分けてグループ内での情報交換の時間を設けた。今までは、折角集まってもサークル同士の交流はされていなかったので、発言する機会が少なかった。現在、グループ間での情報交換が出来るようになり、少しずつだが効果が出てきている。役員の選出も全体に呼びかけるのではなく、各グループから２名を選出してもらう方法に切り替えた。選出方法については、各グループに一任される。最近では一人ではなく、サークル全体で役員を引き受ける事もある。一人だけに負担をかけないようにすることの一つの手段でもある。年間を通しての活動をマニュアル化し、誰が役員を引き受けても出来るような体制を整える必要がある。同様に、松林分館開催のだれでもなんでも展についても部門ごとのマニュアルを作成し、誰でも運営できる体制が必要だと思う。

（ウ）サークル活動のきっかけ

アンケート結果を見ると、公民館のサークルに参加しようと思ったきっかけは、話し相手が欲しかったとの回答が 56％と一番多い。次に多いのは友人に誘われて参加しようと思った回答が 21％となっており、私もその一人だ。公民館を知ったのが、白梅分館の保育室併設講座に友人から誘われ参加したのが最初である。その後、先に活動していた友人から保育サークルへ誘われた事が公民館サークルの活動を始めるきっかけとなった。

公民館がない場所で育った私は講座を受講するまで、公民館が何をしている場所なのかを全く知らなかったのである。友人が誘ってくれなければ公民館に関わるどころか、いまだに何をしている場所なのか知らなかったかもしれない。もっと公民館からの情報発信をすることにより興味を引くことが出来るのではないだろうか？

（エ）サークル活動の重要性

アンケートの結果から、約 81%の人がサークルで活動することはなくてはならないものと回答している。その理由として、仲間との語らいが楽しく一緒に話をしたい、趣味として無理なく続けることができ自分らしくいられるとサークル活動は生きがいとなっていることがわかる。確かに皆生き生きとしているように思える。

コロナ禍の影響として、公民館が休館となりサークル活動の自粛で家に引きこもってしまった、人と話す機会が減り寂しいなどという声が聞かれた。最悪サークルを退会するケースもあった。やはり、対面での活動が必要だと思われる。

（オ）公民館の事業と行事

各館ごとのまつり関係の行事には皆、積極的に動く傾向があるが、３館合同事業の「公民館のつどい」の認知度は低く参加者が少ない。これは各館での温度差があることが考えられる。４月に実行委員会が開催されるが、有志で集まるイベントとの認識からかサークルの会員には参加意識がない。もっと実施目的など明確にし、周知すべきことだと思う。

公民館の事業（講座）についても広報ふっさで掲載や各館ごとでチラシの配布をしているが、他館の講座も一度に確認出来るように一覧表を作成したらどうだろうか。現在年３回、公民館ふっさを発行しているが、もっと定期的に発行出来ないだろうか。アンケートからもインターネットより紙媒体での情報収集が多いので効果的だと思う。

（カ）今後の公民館に期待したい事や提案

（ａ）Wi-Fi 設備があるのにそれを利用しきれていないように感じる。登録のやり方もわからない人も多い。例えば YouTube の公民館チャンネルを作り、サークルの活動の様子やイベントをライブ発信していく。ツイッターで発信できれば若者や子育て世代にも知ってもらえるのではないか？そのためには IT 機器が扱える人材の確保することが最優先重要となるのではないか。

（ｂ）空部屋を開放し、放課後や休校日に子どもたちが集えるスペースにする。遊び・勉強空間づくりとして提供することを視野にいれたらどうか。

（ｃ）講座の組み立てについては、例えばプログラミング教室、利用者が講師の体験教室などの開催が考えられないだろうか。

（ｄ）地域一体となった交流会の実施（公民館利用者・町会・学校・地元事業者

など)

（ｅ）建物自体が古くすぐには解決できる案件ではないが、２階集会室利用のためにはエレベーターの設置など、改善できるところからバリアフリー化を目指してほしい。

（ｆ）公民館までの足がない高齢者の為に、福祉バスの増便や逆ルートでの運行なども提案できるのではないだろうか。

これらの事が一つでも実現できるよう職員と利用者と協力していきたいと思う。

（公民館運営審議会委員　渡部　綾子）

■　白梅分館利用者の視点から

（ア）答申作成の背景　～社会は急激に変容している～

３年前から新型コロナウイルス感染症が世界中で蔓延し、世界中で社会的・経済的環境は大きく変容している。その中で、人生 100 年時代の公民館のあり方を模索しなければならないのは、変化・変容が多岐に渡り、しかも地方自治体の財政にも関係することから、かなり厳しいと言わざるをえないと判断している。

（イ）現在の公民館　～公民館は忘れられている～

そもそも、公民館とはいったいどういうものなのか。社会教育施設として全国に普及するきっかけとなったのは、昭和 21 年７月、各地方長官あてに当時の文部次官通牒「公民館の設置運営について」と９月に発行された「公民館の建設」という本で、地域住民のための学びの施設としての「公民館」が各地で始まり、昭和 24 年に社会教育法により、法制化された。公民館に関わる人たちはこの歴史を知ってはいるのだが、公民館を利用したことのない市民にとっては、その歴史も存在も忘れられているのではないだろうか。福生市では昭和 52 年に公民館が創設されたのだが、その当時を知っている人も少なくなってしまっている。

いつだったかテレビを見ていて、沖縄の公民館でダンス教室をしている様子が画面から流れ、タレントが「公民館！なつかしいなあ、その名前」と言ったのが忘れられない。東京 23 区では、公民館という名前は既に使われなくなってしまっているが、区民センターなど、同じような役割を持っている施設はたくさんある。

コロナ禍で閉館を余儀なくされた公民館の前を通ると、「みんな笑顔で会える

日まで」と書いてあり、思わず涙が出た。時間制限があるもののようやく開館しても、従来のサークル活動はなかなかできなかった。その中で、白梅会館では一部の利用者が敷地内の歌壇を手入れして花を咲かせる活動を始めたことが、「月刊社会教育」令和４年２月号で紹介された。その活動を行った利用者は、白梅分館だより「たまり場つうしん第 26 号」（令和４年３月１日発行）で、今後の展望を聞かれて、「庭の手入れを始めて、公民館に行きたいなと思うことが増えた。みなさんにもこういう活動を通して公民館の良さが広まるといいなと思う」と答えている。これこそ、公民館の本来の姿ではないだろうか。

（ウ）現状はどうであろう　～アンケート実施・ICT 化との乖離～

今回の答申のために行ったアンケートは、公民館でサークル活動をしている利用者が対象だった。その結果、男女別では女性の利用が圧倒的に多く、世代では 60 歳以上がとても多いことがわかった。それも、10 年以上活動している人たちが多いのである。ということは、高齢者になる前から公民館との関りを持っているということだ。どれだけ公民館の主催事業が重要かということがこれではっきりしたのではないだろうか。講座で興味ある人たちが集まり、サークルをたち上げる。自主的な活動開始当初にどれだけ発信できるかということが重要なのである。

今回のアンケート調査結果では、現在高齢の利用者はあまり SNS を使ってないが、これからはもっと多くの人が使えるようになると思われる。設置された機器の有効活用に、より積極的に取組む必要があるのではないか。

かつて公民館には、最先端の設備機器が揃っていたそうだ。今も予算を組んで、積極的に最先端の機器を備えてほしいと切に願う。さらに、職員が研修などで ICT 技術をしっかり身につけて、公民館活動を支えてもらいたい。著作権の権利関係や市役所全体としての情報管理の方針を検討する必要があるが、それぞれの公民館でサークル活動を YouTube などで発信できたら、どんなにいいことだろうか。できれば、各公民館で YouTube チャンネルを持って情報発信をしてもらいたいと思う。

先日も、公民館のつどいや、音楽サークルのつどいなど、実験的に Zoom で行なったが、その機材なども教育機関として住民の学習支援及び環境整備として積極的に進めてほしいと考えている。

（エ）施設面での課題　～人生 100 年時代に対応できない～

松林、白梅の両分館ともに集会室が２階にあるのだが、足の不自由な方や高齢

者の利用には不自由さを感じている。人生 100 年時代に向けてバリアフリー・ユニバーサルデザインの実現に向けた取組みを強く期待する。

人が集まってともに話をする、これがどれだけ人生を豊かにするか、健康寿命を長くする効果があるのだから、公民館として、もっと市民に利用してもらわなくてはならない。

（オ）１億「総孤独」社会　～公民館は社会とつながる最初の扉～

１億「総孤独」社会のテーマの情報誌（週刊東洋経済 2022 年 11 月 26 日号）によれば、現在の高齢者だけでなく、どの世代も孤立化する可能性があり、社会的・経済的分断や格差から、確実に孤独で孤立化している人たちが増えているとのことである。特にコロナ禍では、非正規労働の人たちが苦境に立たされた。本情報誌の特集の中で一番気になったのは中高年女性の貧困問題で、特に子どものいない単身女性は支援の対象外とされ、高齢女性の半分が貧困だとあった。現在の先の見えない社会で本当に 100 歳まで健康でいられるのは、一握りの富裕層だけではないだろうか。私は、公民館は市民にとっての社会とつながる最初の扉のようなものではないかと思っている。誰もがそこで居場所を見つけられるところなのだ。そのために、私たちはどうするべきか、真剣に考えなくてはならない。

（カ）公民館に望むこと・なすべきこと

私は２年前の２月、男女共同参画フォーラムに関わった。最近、この企画が公民館と協働推進課との２課の共催事業になった。他のことでも、こういうことができるはずである。公民館職員だけでなく、市役所総出で参加と協働による住民自治のための学習を支えてほしい。特に、福生市に転入してきた新しい市民に、市役所の窓口で公民館主催講座を案内するなど、公民館を多くの人に周知することに協力してもらいたい。

知らないから人が来ないのであって、本当は利用したい市民はもっといるのではないかと思う。人生 100 年時代の公民館のあり方としては、だれ一人置き去りにしない未来社会にするために、住民がしっかり考えることのできる学習と交流の場と機会を保障していかなくてはならない。

コロナ禍で白梅まつりは何年も中止になった。人が集まれないという状況は、人との繋がりを中断させ、まつりの準備のことなど、襷がつながらなくなってしまっている。この先もまだパンデミックは続くだろうから、それに合わせて私たちもこれまでの集う、学ぶ、交流する形を変えながら、イベントを継続実施して

いかなくてはならない。

以前のような賑わいの溢れるような白梅まつりが、何年先に実施できるかわからないが、利用者同士が結束し、内容を工夫しながらつなげていかなくてはならない。そのためにも、Society5.0 で示される ICT の技術を学習の場に積極的に取り入れ、しばらくはリモートなどで実施できるよう、公民館の学習支援機能や設備強化をお願いしたいと思う。

福生市公民館では各館がデジタルシニア講座を行っている。いずれは、高齢者だから SNS は使えないということがなくなるはずだ。どんどん SNS を使って公民館情報を発信すべきである。

（公民館運営審議会委員　三浦　理恵）

（２）音楽活動等における居場所・世代間交流について

■　音楽活動等を通して人々の居場所となる公民館　その１

今回のアンケート調査では、サークルの活動内容が音楽と回答した人が27.3%と最も多かったため、音楽活動等を通して、公民館がどのように利用者の居場所となっているかを考えた。

音楽の場合はピアノの独奏のように一人で演奏する楽しみもあるが、複数で楽しむ人も多い。また、自宅で大きな声で歌ったり、楽器の演奏をしたりすることは、一般的には難しい。そこで歌や楽器の演奏を楽しみたい人は、サークル活動に参加し、公民館を練習場所として利用している。

複数の人が集まって演奏する場合、曲が止まらずに最後まで演奏出来た、ハーモニーがきれいに決まった、難しいリズムの絡み合いがぴったり揃ったなど、練習を重ねることによって課題を克服した喜びが生まれる。それを仲間と共有できたり、指導者から褒められたりすると、その喜びが何倍にも膨らむことがある。これを味わうと、また次もやってみよう、もう少し難しいことにチャレンジしようと、意欲をもって活動を長く続けることができる。なかなか上手くできない場合も、アドバイスしあったり、励ましあったりすることで、仲間との信頼関係も高まるだろう。そして発表の場で演奏を聴いてくれた人たちが喜んでくれると、更に次も頑張ろうと新たな目標を持って練習に励むことができる。こうして仲間や指導者との絆の深まりや、発表での達成感により、サークル活動がその人にとって日々の活力となるのである。

各自が参加しているサークルの魅力については、約半数が指導者やリーダー、仲間が素晴らしいと回答している。まさに、サークルが気の合う仲間や尊敬する指導者に囲まれた大切な居場所となっている。

また、音楽はスポーツのように体を激しく動かすことはないので、ある程度高齢になっても長く続けている人が多い。体を動かさないといっても、歌唱や管楽器の演奏は腹式呼吸を必要とするので、健康的に長く続けられる要因にもなっているだろう。楽譜を見て音符を目で追いながら、指揮者の指示や他の人の音に合わせて演奏するということは「脳トレ」としても大変効果的だと思われる。今回のアンケートで、公民館を利用するサークルのメンバーは高齢期の人たちが多い印象だが、高齢でも元気にサークル活動できるのはこうした多くの要因があるからだろう。

また、サークル活動が住民にとって地域に根付くための力になっている場合がある。

縁もゆかりもない福生に、就職、転勤、結婚などをきっかけに住むようになった人が、サークル活動に参加して、たくさんの知り合いができる。更に発表の場として福生の祭りや行事に参加することにより、寝泊りするだけだった場所が、本当の「地元」となっていく。また、ある人は新しく家を購入する時に、他市を選択せず、そのサークルに参加し続けることを考慮して、福生市に住み続けることを選択した。別のケースでは、遠方に転勤を命じられた人が、サークルを続けたいことを理由の一つとしてその会社を退職し、近隣の会社に再就職したという話もある。

このようにサークルがその人の大切な居場所となったとき、そのサークルが活動の拠点とするまちも大切な居場所となっていく。そういう人が増えれば、公民館も人々が集う賑わいのあるみんなの居場所となるのではないだろうか。

今後、特に音楽系サークルが公民館で活発に活動し続け、参加者が長く楽しく在籍するためには、発表の場を作っていくことが重要だと考える。発表の場があるということは、目標をもって活動できるということだ。コロナ禍であらゆるイベントが中止となった時には、目標がなくなり活動から離れてしまう人もいただろう。市民会館のホールだけが発表の場ではない。公民館まつりのような発表の仕方もある。出張公民館のように学校や公園に出向いて発表するという形もあるだろう。

また、以前のような音楽講座も復活してほしい。子どもから高齢者までが本番に向けて同じ目標をもって練習を重ねるのは素晴らしい経験になる。サークルに属することをためらう人も気軽に参加でき、これをきっかけにサークルに参

加するようになるかもしれない。サークル同士の繋がりも生まれるようになるだろう。

以上のように、音楽活動等のサークル活動における公民館は、自宅ではできない練習の場であり、仲間と過ごす大切な居場所である。公民館はその居場所を安定的に提供し、活動をサポートする重要な役割を担い続けてほしい。その結果、福生のまちに人々が定着し、長く生き生きと過ごせるようになるだろう。

（公民館運営審議会委員　富田　久美子）

■　音楽活動等を通して人々の居場所となる公民館　その２

「人生 100 年時代における公民館の役割について」の諮問を受け、公民館３館（福生市公民館・松林分館・白梅分館）に於いて行った各サークルへのアンケート調査は、令和４年夏、延べ１か月間で 553 の回答を得た。

令和２年１月以降、コロナウイルス感染症拡大の影響で、対面集合型であったこれまでの公民館の利用と学びのスタイルが、公民館の休館や利用者側の自主的な休会などにより、コミュニケーションのスタイルは、様々に変化した。この事は、今回のアンケート調査の背景となる。このアンケート結果を基に、また自身が音楽サークルに関わる体験から感じる事も含め、今後の暮らしのデザインの方向性と公民館利用のあり方を考える。

今後の公民館に期待する役割との設問では、「いつでも誰でも立ち寄れ、賑わいを感じられる場づくり」（48.4%）、「初めて公民館を利用しようという人への取組みの充実」（14.0%）とある。この二つの回答は、公民館サークルに参加する全ての人の共通の思いであると思う。賑わいを感じられる場所で、仲間や指導者と一緒に歌ったり時には発表をする。発表の際には近所の知人や友人、音楽仲間を誘い合って聴いてもらう。利用者の中には何十年もサークル活動を続けている人も多く、私の母もその一人であった。いわゆるママ友の関係性は 50 年も前から存在しており、弟の小学生時代の PTA やご近所のお付き合いの延長に公民館があり、ママ友との民謡サークルで、公民館活動の賑わいの中、長い間充実の時を過ごし、メンバーが米寿を超えた最近まで続いた。

解散後、皆高齢となり家から自由に出られない状況になっても、電話を掛け合ったり葉書を書くなどして近況報告している。歌う事を通じて長年に渡り日々積み重ねてきた信頼関係が、高齢となった今の生活の安心の基盤となった。公民館の存在がなければ、今までの心の健康と、活舌の良さは果たして保てたのだろ

うか。大きな声を遠慮せず響かせ、三味線の音色を楽しみとした。公民館卒業組に学ぶ事は多く、歌う事に留まる事なく、解散までの間それぞれが地域での人の輪を確実に広げて行った。この人たちの経験からなる、人を楽しませる話術、継続力や企画力など、公民館利用者に還元して頂く事ができたらと思う。現在活動中の高齢の利用者も、いつまで歌いに来られるかな、などの不安を持つことなく、むしろさらに堂々と別の形からの活動の仕方の工夫があって良い。

一方で、「初めて公民館を利用しようとする人への取組み」について、これについては前節の「その１」で富田委員が触れているが、就職や結婚を機にこの街に住むようになり楽器の演奏などを通じて多くの仲間と出会い、徐々に地元意識が芽生え、福生に愛着を感じて暮らすようになるといった事がある。転勤を命じられるも、退職をしてまでもサークル活動を優先するといった事がある。音楽を通じて育まれるものがいかに人生に影響するかということだ。先日の新聞の投稿欄に、「夫の転勤で新しい土地に慣れずにいたが、それまで楽しんでいたフラダンスのサークルが公民館にあると聞き、見学に行くと思いがけずご近所さんがいた。次の朝互いに玄関前を掃除しながら嬉しい気分で挨拶できた。」とあった。趣味のフラダンスが続けられる嬉しさと、ご近所さんに顔見知りができた喜び、後者の比重が大きいと感じる。公民館が日々の暮らしに繋がった例だ。

時々家の周りで、子ども連れの若いお母さんに「図書館はどこですか。」「〇〇公園はどこですか」などと聞かれる事がある。他市他県から越して来たばかりでまちの様子がまだわからない不安な中、とりあえず安心な場所、または何か日常の情報がわかる場所として行ってみようとの思いである。暮らす人にも、新しく住民になった人にも、「いきなり公民館」への少し高いハードルを丁寧にゆっくりと下げてくれる市民の存在がもっとあって欲しい。

初めて公民館を利用しようとする人は、多くの場合そこでどんな事が行われるのか、どんなサークルがあるのか、そもそもサークルとは何だ、というように、そこでの自分の生かし方が見当つかないかもしれない。どんな建物で、設備はどうなのか、小さい子どもがいたり、身体に心配事があれば尚、不安がある。

ホームページで調べれば何でもわかるとはいえ、もっと親切な招待方法があるのではないか。新しく住民になった世帯対象にウェルカム講座を開き、小さな音楽会やコーラス、手品や踊りなどで歓迎したり、伝統文化教室の子どもたちの日本舞踊を披露したりすれば、演じる方にはボランティア意識が芽生え、対象者には安堵感が生まれるのではないか。このサイクルを公民館サークルの活動の中で循環できないか。音楽サークルの活動で言えば、練習の目的として、人前での演奏が大切と考える指導者は多い。大・小ホールを利用させて頂いての発表の

場も状況次第ではあるが、年間２回ほどある。だが、現状公民館に馴染みのない初めての人が音楽祭や文化祭等での音楽発表に足を運ぶ事は少ないだろう。

正しい情報発信の場所として、今後公民館は現在よりもさらに先を照らす役割が大きい。

そのような存在だという事が意外と周知されていないかもしれない。利用者の年齢の多くは 60 代から 80 代。若い世代の関心を向ける為に、こちらからもっと具体的に関心を寄せたい。

（公民館運営審議会委員　石川　慶子）

（３）学校・高齢者施設の現場からの視点から見た公民館との連携や課題について

■　学校を視点とした公民館との連携及び課題

（ア）学校の現場から見た公民館との連携及び課題

公民館は社会教育法に位置付けられ、この法律の中でその設置の目的が示されている。

（社会教育の定義）

第２条 この法律において「社会教育」とは、学校教育法又は修学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律に基づき、学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む。）をいう。

社会教育法（昭和 24 年６月 10 日施行）抜粋

第五章 公民館

（目的）

第 20 条 公民館は、市町村その他一定区域内の住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もつて住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的とする。

社会教育法（昭和 24 年６月 10 日施行）抜粋

ここから、公民館は、学校の教育課程を離れた放課後や休日等の時間、更に学ぼうとする子どもたちを受け入れる機関ということが分かる。

平日において午前中は学校教育課程内であるから、利用可能なのは放課後である。公民館の利用時間は午後１時から４時 30 分までとされており、終業が午後３時 30 分以降となる小学校高学年の児童や部活動のある中学生は平日の利用は現実的ではない。午後５時 30 分からの夜間利用となれば、児童は保護者同伴でなければならないが、保護者が外での勤務に出ている場合は帰宅する時刻は遅く、場合によってはそれまでの時間、習い事などで埋められていることも多い。

休日は家族と過ごす時間、どのように使うかは各家庭に任されており、公民館での催しやサークル活動への参加が楽しみの一つとなっているご家庭もあるに違いない。

しかしながら、福生市公民館利用のきまりには「義務教育を修了していない者が施設を利用する場合には、成人者の同行または、保護者の承諾書が必要」とされており、自由に子ども同士で出かけられる場所ではないのが前提にある。

子どもたちにとって公民館は「保護者の許可がなくては利用できない場所」であることは間違いなく、利用しやすい施設とは言えないと思われる。

（イ）子どもたちにとっての公民館とは

実際、福生市においては、学童クラブや児童館、ふっさっ子の広場といった小学生のための放課後の居場所が提供されている。また校庭開放や公園などもあり、友達の家へお邪魔することも含め、子ども同士の遊びの場が居場所となっている。

中学生ともなれば、終業時刻も遅くなり、加えて部活動等々、それぞれが所属する場所が存在している。特に部活動は、生涯学習にもつながる興味関心を生み、熱心に取り組む生徒も多いと思われる。

学校の校庭は様々な団体が利用し、夜間・休日には児童・生徒が所属するスポーツチームも多数存在している。

このように、義務教育期間の子どもたちには、公民館以外に、仲間と集い自分の学びを広げる場所が既にあるため、ほとんどが公民館に集う必要性を感じていないのではないかと思われる。今回の利用者アンケートにも学齢期の子どもの利用者数が少ないことがうかがえる。

保護者が講座等の内容に関心を持ち子どもがそれに強い興味を持たなければ、もしくは子どもが興味のある講座を見つけて保護者を説得して合意と協力を得なければ行くことのできない公民館は、子どもたちにとっては少し遠い存在で

あるのかもしれない。

（ウ）学校との連携事業の可能性

～将来的に有効活用できる市民となるために、今できること～

現在、市内の小中学校において、公民館とのコラボレーション事業（授業）は行われていない。公民館事業の案内（リーフレット等）を学校で配布することはあるが、それを手にした子どもと保護者が公民館をどのくらい認知しているだろうか。利用するきっかけを作るためにはその「認知度」と「関心」が必要だと考える。

例えば、市内の学習を始める小学３年生に向けた施設見学や説明の授業、または、６年生の税金の使われ方を学ぶときに、具体的な数値を示しながら社会福祉や生涯学習について理解を深めさせるためのゲストティーチャーとして、公民館職員等が授業を行うことはできるのではないだろうか。

または、公民館で活動する（学んでいる）サークル等がその分野を生かしてゲストティーチャーとして、子どもたちの学びのお手伝いをしていただく、そのコーディネーターとして公民館に力を貸していただくこともできるかもしれない。例えば、子どもたちの学習支援をしてあげたい、同じように思う仲間と一緒にできないかと考える方々に、家庭学習の支援や学習の補習を必要とする子どもたちが教えてもらえる場所があったら、子どもも学習支援の力をもった方々も主体的に生き生きと学ぶ事のできる公民館としての活用がされるだろう。地域の方と子どもたちの交流にもつながり、他の取組みや催しの活性化にもつながる可能性がある。保護者からのニーズもある内容と考える。

学校の授業内容とリンクした内容の講座をタイムリーに開催する、または学校での学びを生かし、更に深めたい子どもの興味・関心に焦点を当てた内容を扱うことも、子どもたちの利用を促す方法の一つだと考える。公民館が子どもたちに体験させてあげたい、学ばせたいと思うことと、子どもたちのニーズとをうまくマッチングして計画していくことが必要であると思う。この場合、学校は年間の学習計画を公民館に提供し、事業と授業の協力をしていくことが大切になってくるであろう。

公民館とは何なのかを知り、公民館にかかわる人たちとの交流を通して、子どもたちは公民館や公民館の活動に関心をもち、将来的に生涯学習の場として利用していくのではないだろうか。

（公民館運営審議会委員　山岸　史子）

■　高齢者施設の現場からみた公民館との連携及び課題

令和４年版高齢社会白書において、日本全体での 65 歳以上人口は 3,621 万人となり、総人口に占める割合（高齢化率）は 28.9％である。また 65 歳以上の健康寿命は男性が 2.26 年、女性は 1.76 年延びて、さらに平均寿命の延び（男性 1.86 年、女性 1.15 年）を上回っていたとされている。

この傾向は、今後も続くと考えられ、公民館活動においても高齢化社会の状況を鑑みた取組みをこれからも模索していくと思う。

冒頭に記載したように、現在の高齢者社会において健康寿命が延びているとされているが、該当しない方も多いと思われる。それでも実際の生活であり、命を終えるその瞬間までが人生であるから、どこに身を置き、医療や介護を受けられていたとしても、その地に生きる者同士が様々な形であれ、お互いに学びあい、些少であろうとなかろうと良い変化をもたらすのであれば、高齢世代の個々人が人としての輝きを増していけるのではないだろうか。

その取組みの中で、公民館活動を活かすことは出来ないだろうか。

公民館は、老若性別、人種等だけでなく、その区域内に住む全ての住民を対象としている。また、そのように考えた時、住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与するのは、公民館活動されている方だけではなく、高齢者施設利用者にも共に出来ることがあると思う。

（ア）高齢者施設の利用者と公民館サークルとの連携・協働

高齢者施設従事者が地域で活動している団体・個人に望む交流や連携は、地域で活動されている方々が施設を訪れ、なかなか外の社会と交流する機会が少なくなってしまわれた利用者の皆さんに喜びや楽しさ、感動などを与えてもらえることへの感謝と、そういった機会や交流できる団体を少しでも多く増やせたらという思いがある。

また、施設を訪れてくださる個人や団体の方々も同様に、喜びややりがいを感じ利用者の皆さんのことを理解し、施設の状況なども学び理解していただくことで、活動の幅をひろげていくことも期待している。それ自体は本当に良いことで、関わっている皆様には続けていただきたいし、広げてもいただきたいと考えている。

しかし、公民館で活動されている方々が、心身の状況によりやむを得ず自分がイメージしていたことが出来なくなった時、現状では多くの方が活動自体を仕

方なく辞めるものだと考えているかもしれない。それでもまだ人生は続いていく。もちろん出来ることと出来ないことは、間違いなく変化するだろう。でも、もし、多くの人が自分に合わせて人生の在り方をチェンジする時期が来ただけだと自然に体感できるようになれば、老いに対する不安を少しは払拭できるのではと思う。

（イ）「担い手・受け手」から共に生きる支援づくり

ここでは、その為の連携と課題について考えていきたい。

心身共に健康な方は支援をする側、与える側（担い手）の役割が主で、そうでない方は支援を受ける存在（受け手）と考えてみる。

この境界線の時期には特に、出来なくなる事が増えてくる不安や、急激に訪れる大きな変化に対する不安が、当事者のその後に影響を与えることがある。

実際に体調を崩されてから、継続していた活動が難しくなった方が、いつの間にか見かけなくなり介護サービス利用後は、それ以前の人との関りが一切無くなってしまうことがある。

高齢者支援に関わる者としては、やむを得ず環境が変化したとしても新たな人間関係の構築はもちろん可能だが、以前の関係も失わずにいられたら良いのにと思うことがある。

なぜなら、それは新たな不自由な状況をとても辛く感じ、以前関係を有していた人と関わるのを避けるようなこともあるからである。それは、担い手と受け手という見えない何かしら壁のようなものが、生まれてしまうからかもしれない。

公民館活動に関わる方々が、施設利用者の方々と関わる際に自分事として感じていくための学ぶ機会を得ていくことで、施設利用者とのふれあいや交流という場面においても良い効果を生むのではないかと思う。

その中で、施設利用者の方々自身が、自分たちでも地域の人と関わり、老いへの不安を少しでも和らげ、時には子ども世代とも学びを共有できるようになれば良いと考えている。

では、それに向かうための工夫をどうすすめていけばいいのか。

一つの取組案として、子ども世代から、高齢者施設等で生活をされている方と普通に接する環境を作ることである。その取組みの中に公民館での活動が活かせるように、世代の異なる団体が協力して施設慰問などのプログラムを工夫するのも良いかもしれないと考えている。

例えば、自分たちの健康増進や楽しみ、生きがい、やりがいという目的のための活動があるとして、それを他者に教えるのではなく伝える、手間を尊び共に行

うことができる考え方を学ぶのもその一つである。もちろん現在でも様々な分野で課題として考えられ、多様な取組みが試行錯誤されているが、それぞれが目的をもって検証しながら進めていくことは、お互いにとって有効なプログラムになるはずである。

高齢者支援に関わる職員は、公民館等の地域で活動する様々な団体、個人を受け入れる際に、受け手だけの視点でとらえるのではなく、団体や個人の方々に向けて、高齢者自身が伝えられるものを丁寧に見つけていく姿勢も大切である。そのためには、高齢者支援に関わる職員も公民館等の地域で活動する様々な団体、個人のことについて学ぶ必要があり、お互いが学びあう機会を公民館がアプローチするのも良いかもしれない。

施設側職員と公民館利用者が学び合う取組みを進めていく中で、施設利用者も自分たちが何か伝えられること、学びを共有できることを知り、さらに高齢者同士の交流やふれあいの場を工夫することにより、世代を超えた公民館活動をより広げられる可能性があると思う。

（公民館運営審議会委員　中村　瑞穂）

（４）学びの場と地域での活躍の場について

■　公民館の学びの場の未来に寄せて　その１

戦後の復興・成長と共に公民館は今や地域になくてはならない存在となった。公民館職員や根付かせようとした人々の努力の賜物である。特に、高齢期の生きがいのある生活・活動作りの広がりに取り組んできたことで、現在、活発なサークル活動が行われるまでになったのである。

今回実施の調査結果からも長期間、サークル活動が継続してきたことが裏付けられた。一方、現在サークル活動の中心を担っている高齢者は今後減少していくのは確実である。だから、今からその対策を考える必要がある。私なりにここ数年間、公民館とかかわってみての考えをまとめてみようと思う。

（ア）公民館主催事業のわかりやすさへの取組み

公民館は、保育室併設講座や夏休み中心の小中学生向きの教室、成人向けの教室、高齢者対象講座と数多く主催してきた。しかし、どの世代に重点を置いてどういう講座を企画するかを、今後は事業を企画する段階から住民が参加する枠

組み（小金井市などが実施している公募市民の企画実行委員による事業の企画・実施制度）の事業なども参考にして、新たな住民の学習要求を把握し福生市の基本計画なども参考に、事業を企画・実施する仕組みづくりを進めてほしいと考えている。

（イ）新たな利用者に繋がる取組みの検討

先日、全国公民館研究集会の事例発表で、中学生に公民館まつりのロゴマーク作りを依頼した事例があった。ロゴマーク作りから、中学生が高齢者とベーゴマまわしで交流する迄になったそうである。新たな利用者獲得につながる事例ではないかと思う。福生市の公民館祭りにも取り入れられそうな事例でもある。ただ、中学校側と公民館側とが意思疎通できる迄が大変だったろうと思った。また、事前準備段階で「やってみよう！」「取り組んでみよう！」「時間を作ろう！」という前向きの姿勢が新たな利用者獲得に必要だと感じたところである。このような目に見えない職員の方々の努力も必要である。

話は変わるが、私は定年後の学びのきっかけに公民館が有効だと考え、コロナ禍の前と後に数回、公民館主催の講座を受講した。地方にいた頃公民館を利用したことがあったからだ。単発の講座はなかったが、市民文化教室終盤に、２回とも今の習っていることをサークルとして継続していかないかという話が出てきたのだ。正直、サークルの話をされても戸惑いを覚えた。私としてはサークル活動をしたいのではなく、純粋に講座そのものを楽しみたかっただけである。どのような人を対象に講座を開くかによりサークルの話はした方がいいに違いない。仮に今ある市民文化教室でサークルにして継続させるという話をするならば、サークルの場合の長所や短所、また会議室の利用方法の説明のある小冊子があると良いのにと思った。なお、講座最終回に既に同様の活動をしているサークルと、交流の場を設ける機会にしたら良いと思う。また、私は華道を市民文化教室終了後にもう少し習いたくて、公民館という場所を使わせていただこうとしたことがあった。その時には思うような利用はできなかったが、利用者全てに公平で利用しやすいシステム作りが求められると思う。私は現在別の形で華道を習っている。公民館の学びがきっかけで人生が豊になっていることは確かである。多くの人に同様の機会が与えられることを願う。

（ウ）公民館施設の周知の拡大

私のように公民館を知っている者がいる反面、公民館を知らない人がいると思われる。幼い時に１度でも公民館に関わった経験があれば、公民館という存在

は知っていると思う。しかし存在すら知らない人もいると思う。いかに多くの人々に知ってもらうかの工夫が大切である。特に、福生市には多くの外国人が住んでいる。その人たちが利用しやすいシステムを考えていただけたらと思うのである。例えば、公民館利用の掲示物の作成を小学生や中学生に手伝ってもらい、それを病院や学校等数多くの施設に掲示してもらえばと思う。身近にできる事から始めたらと考える。また、その為にもすぐ相談できる横の施設同士のネットワークを構築しておきたいところである。

（エ）活動の成果の発表場所の拡充

常時サークル活動している人たちの拠点は、主に公民館だ。私は発表の場が公民館だけでなく、市内の施設での発表会場の拡充を図る努力も必要だと思う。それをすることがサークル活動の地域での活躍の場を広げることに繋がると思うからだ。この機会にサークル内でもサークル活動の在り方を考えて欲しいと思っている。サークル活動の継続には職員の力以外に、私はサークル活動者自らが発信することが大切だと思うのである。

（オ）学習支援のためのデジタル機器環境の拡充

現在、福生市の講座にも高齢者向けデジタル講座が増えてきているのは歓迎すべき内容である。コロナ禍で市民音楽祭を配信する試みもよい一例だった。コロナ禍を通して重要なことの一つが分かったのは、これまでの活動を継続することだと思う。IT を駆使し公民館の活動実践を配信すれば、それを見て公民館に興味を抱いてくれる新たな利用者の拡大につながると考える。その為に、他市町村のやり方で参考にできるところは真似て欲しいと思っている。これまでの対面での活動や紙面での発信が大切でも、引き続きデジタル機器環境の拡充を忘れないで欲しい。

以上、公民館の未来に寄せての考えをいくつかまとめてみた。何らかの参考になることを祈るばかりである。

（公民館運営審議会委員　末木　瑞枝）

■　公民館の学びの場の未来に寄せて　その２

（ア）公民館活動の柱

公民館には、主催講座とサークル活動支援という柱がある。

公民館の講座は地域づくりの主体を形成する拠点として、単に住民の知的好奇心を満たすだけのものではなく、市民を取り巻く地域の課題や問題解決の糸口となり得るもの、得られた知識や技術を生活向上のために活かすことができるもの、豊かで充実した人生を送るための糧となる内容であることが求められる。

（イ）主催事業としての講座

講座は、地域住民として生活する中で、市民が今学びたいこと、今後どのようなことを学ぶべきかを、自ら主体的に学ぶ場と機会の提供として実施されている。教育機関としての公民館は、市民の学びを専門的に援助するための職員が配置され、市民に学習する場を提供している。講座を通じて市民自らが地域、生活に対する問題意識を持ち地域活動への参加意欲を促すことができるようになる。つまり、公民館における学習は知識や情報を得ることに留まらず、人間として地域社会の中で生きていくための力を養う学習と言える。

（ウ）公民館保育室

保育室事業は、講座参加者の子ども（未就学児）を保育室で保育者が預かり、その間、保護者は講座室で学習する。それぞれの講座の学習内容の他、子どもを預ける親同士や他の参加者との学び合いを通して、毎日の生活や育児を共に考える機会としている。保護者の学習のための託児ではなく、子ども自身が学習の主体であることを基本的な視点として、保育室事業として公民館が主催で実施するものである。

（エ）地域活動への積極的な参加を支援

公民館・公民館利用者の学びを活かす場を地域に広げていくことで、今まで公民館に興味がなかった市民にも、公民館をアピールできる。住民の学びや交流の成果を地域に広げることで、公民館を訪れる事が難しい社会参加に制約の多い人々にも公民館の関心を持ってもらいたいと思う。

さらに、公民館は市民一人ひとりの学習支援に努める一方、公民館の中だけの学習ではなく、市民がより身近で利用しやすい環境づくりを進めることも求められている。

公民館の学習は、個人が自身の学習要求を満たすだけでなく、共に学ぶ関わりの中からお互いを理解し、相互に学ぶ関係性を生み“主体的な市民”に成長して行くところに意味がある。その学習過程で自らの内面を変革した住民による自

治こそが、地方自治を実現する道だと考える。そのため、地域活動へ積極的な参加する活動を支援する仕組みこそが、これからの公民館の果たすべき役割だと思う。

（オ）公民館の学びの場の未来に寄せて～学びの循環～

公民館は、太平洋戦争敗戦後に民主的な国家を作り直すため、学び合い交流し合い連帯し合う場として市町村に設置され、その機能と役割として地域づくりの主体を形成する拠点とされてきた。

今日まで 70 年を超える公民館での学びの蓄積では、私たちの生命と暮らしと守るための学習や、生活に必要な知識や技術を学ぶ取組みも行ってきた。

今日、個々人が多岐多様な価値を表明し個性を発揮して生活できるようになったのは喜ばしいことであるが、多様な課題と解決に向けた住民の力量形成がなければ、今後の誰一人置き去りにしない社会の実現は、行政の囃し言葉に終わるのではないか。

そこで公民館で多様な住民と交流し相互に学び合うことは、社会的な存在である自己に気づき高めていくきっかけとなる。そして地域の課題を解決するのは自分であるといった当事者意識に気づいた後は、系統的で継続的な学びを仲間とともに深め、異なる意見を持つ人や団体とも合意形成する力量を生み出し、課題解決のために政策提言を生活する地方自治体に陳情請願するといった、地方自治を担う住民が誕生する。

実際に公民館保育室の託児付き講座（整理収納アドバイザー講座）に参加された方が学びを通じさらに知識を得ることで資格取得を目指した。公民館の学習をきっかけに、“主体的な市民”へと成長する取組みについてお聞きしたことを記す。

Q：整理収納アドバイザーの講座に参加しようと思ったきっかけはなんですか

A：元々お片づけに興味があって、本を読んだりしながら、自宅を片付けていました。整理収納アドバイザーさんが公民館の講座で講師をされるとのことで、前のめりで参加をしました。結果的には２回参加しました。

Q：公民館保育室に参加されてどう感じましたか

A：１回目の講座に参加してから、整理収納アドバイザーの資格が身近なものだと感じ、以前よりも興味を持ち始め、資格を取得しました。講座内容

は、知っていることが多かったから、答え合わせ的な感じで参加していました。講座内容よりも先生に興味があったような記憶があります。

Ｑ：整理収納アドバイザーの資格をとろうと思った理由はなんですか

Ａ：受講生さん（育児中のママさん）たちが整理収納に悩んでいることを知って、力になりたいなと思ったので、資格取得して仕事にしようと決めました。

資格をとり始めてから、他県の整理収納アドバイザーさんの交流会などに参加し始めて、私もその中に入りたい！と思い、フリーランスで働いてみたいと思いました。

Ｑ：資格を取得してから活動につながるまでに苦労したこと、こんなサポートがあればよかったなどありますか

Ａ：資格取得や整理収納アドバイザーの交流会や勉強会で片付けのことはわかるようになりました。しかしビジネスとして成り立たせるまでにはかなり苦労し、今でも苦労しています。公民館の講座から資格取得して、それを仕事にするまでをサポートしてくれるサービスがあると、講座ももっと盛り上がる感じがします。現在、仕事はお休中ですが、再開したら地元に根付いたサービス展開を行いたいと思っています。具体的には介護経験を活かして、高齢者宅のお片付け事業を始めたいと思っています。

市民が学んだものを活かす場があれば、公民館での学びは、受身の学習から地域への積極的な発信へと変化し、より社会教育的視点を持った活動として活かせる。講座を受けた市民や、自主活動の中で学習を重ね、それを還元できるシステムづくりが今後さらに必要と考える。

（カ）公民館の学びの場の未来に寄せて～新たな役割～

公民館は、施設・職員・機能をもって、市民の主体的な学習で求めに応じた援助する役割を果たします。このことは、現在でも子どもから高齢者まで、あらゆる階層の人々の学習機会が保障されることが望まれている。公民館の事業・講座が地域課題や生活課題の解決に必要とされる学習であるためには、地域課題の把握や分析力が必要です。これからの公民館は、今まで以上に他の領域と協働しながら運営していくことが重要になってくると考える。特に、職員には地域の課題だと位置付ける視野の広さと深さ、住民の声（課題）を聞くことができ問題点を共有出来る力が重要だと思われる。それは、また、多様性を受け入れながら、集団として全体が向かおうとする方向性を見失わないということではないだろ

うか。今後は、多くの団体との協働を模索しながら、公民館としての新たな活動方針の確立・提示をしていく必要がある。“公民館利用者とは全住民である”という認識に立って住民の学習を支援していく役割を強く意識し担ってもらいたいと考えている。

（公民館運営審議会委員　三浦　佳江）

５　人生 100 年時代における公民館の役割について

今回の諮問を受けて、福生市公運審委員のそれぞれの立場から、アンケート調査結果を参考に意見を述べている。以下には、それぞれの委員の声を参照し、まとめる意味も含めて今後の公民館の役割について述べることとする。

新型コロナウイルス感染症による社会的な厄災を経験し、これまでの社会からの変化や新たな課題を踏まえた新しい時代の生涯学習・社会教育は、どのような在り方やデザインとなることが考えられるだろうか。しかも、国をあげて Society5.0 の社会実現に進む方向が示されていることなどから、現在の組織や事業の継続という単純な答えでは、今後の少子高齢人口減少社会と持続可能な社会に対応した公民館の姿は見られないだろう。

これらの課題に応えることは、今回の公運審の答申では荷が重すぎる。

昨年７月に公民館長から諮問を受けた福生市公運審としては、短期間に調査を行いその結果をもとにまとめたこともあり、人生 100 年時代を見据えた公民館の機能と役割を公運審委員同士で議論する時間が不足していたこと、そして何より福生市内や近隣公民館での先行研究に該当する事例も少ないことから、確固たる姿を描くことには無理があると考えている。

そして、今回の調査結果では、公民館利用者としては Society5.0 が指し示す社会構造に沿って進もうとか、リンダ・グラットンの指摘するマルチステージ化に向けて、自らがリスキリングや学び直しの必要性を強く感じている割合は高くなかった。

しかし、職員にとっては常に必要な考え方ではないだろうか。その背景には、公民館講座参加者の中に、公民館の講座に参加したことで自らの生活に新たな発見があり、その発見が新たな学びに発展し、その後新たな資格を取得し起業した事例も紹介された。また、福生市公民館の過去の事業で、簿記の資格取得を目指した事業があったことも記憶している。そして福生市内には多くの外国人が生活していることもあり、外国人の日本語の学びを支援する団体による、日本語検定のための学習支援なども散見されている。

日本で自立して生活するためには、国籍や性別に関係なく仕事のために資格を求められる現実もあることから、今後は実際生活に即した新たな学習支援も考えられる。

新たな社会課題に学びを通して対応し、自己実現を目指す住民からの学習要求に応えるためには、公民館職員は常に学び続ける役割がある。

アンケート調査結果では、公民館の今後の役割として、いつでも新たな利用者を受け入れてほしいという声が多かった。公民館での学習・交流といった取組みや支援は、今後の地域課題に常に対応しうる力になると考えられる。

特に音楽活動を通した学びの中に、人間関係の豊かさを見出せた事例や高齢者施設との公民館利用サークルとの関係で、双方が学び合うことでお互いの生きる力になるとの指摘もあった。一方、自らのサークル活動と他のサークル活動との連携や協働するといった視点が弱くなっていること、そして地域社会の課題を見出し、解決のために自らが役割を担う勢いが弱くなっていることなども指摘されている。また、小学生が公民館を利用するための現実的な不自由さも改めて浮き彫りにされたが、それでも公民館利用サークルと学校との連携や協働の視点は見えてきている。

そして、３年前から全世界の社会と経済に大きな影響を与えた新型コロナウイルス感染症による学習環境に与えた大ショックは、IT 機器の利用による新たな学習方法の急速な普及をもたらしたが、やはり対面接触型によるサークル活動の重要性も再認識された。今後は、両側面での学習環境整備の必要性が強く望まれている。

また、上記以外にも生活に困難を抱える家庭や子どもたちへの支援、外国人の家族、障害のある人たちへの支援、社会的に孤立しがちな若者や高齢者への支援といった、社会参加に制約の多い人たちに対する社会的包摂に関する課題がある。単なる自治体の社会的・経済的課題への対応という枠組みだけで解消できるというものではなく、人々の生活課題を解消しようという学習・文化活動をともなう、新たな取組みの中で溶解されていくものではないだろうか。その意味では、これまでの個人での取組みより仲間と共に学び行動する、力量形成できる取組みを基本とする社会教育・生涯学習に成果があり効果的な取組みと考えられることから、福生市の現状では、公民館が継続的な価値を生み出す有効な機会と場と考えることができる。

そして、現在の公民館利用者の大部分が 60～80 歳代の高齢世代であることから、その人たちを人材や資源と考えることによって、力を発揮する場と機会を公民館が用意することで、地域社会でなくてはならない公共空間となると思われ

る。
　そのため、今後の公民館の対応すべき方向性について、数点提案する。

（1）これからの公民館が向かうべき方向について

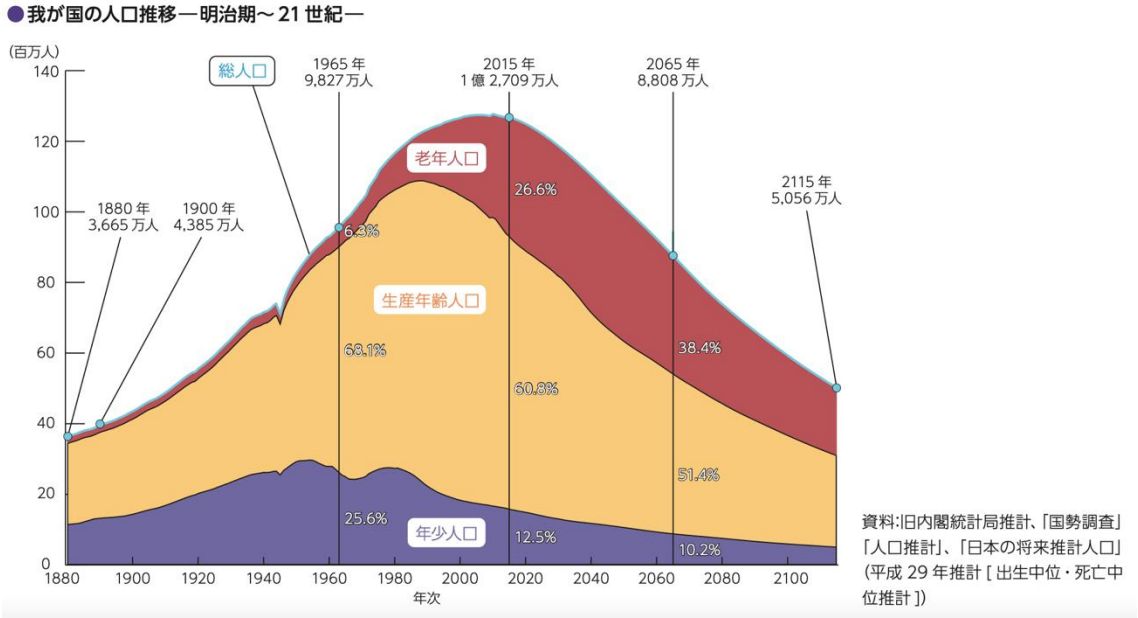
「知見豊かな高齢世代が核となって、課題ごとに解決や解消に向けた取組みをする機能集団に、住民が参加できる仕組みづくり」

　Society5.0 の示すこれからの社会の様相としてロボットと AI による快適な生活空間とされても、現在の高齢世代に新たなリカレント教育やリスキリングといった学び直しを求める必要はないし、アンケート結果でも求めていないことが判明している。
　では、AI や IT 環境の充実は高齢世代には全く不必要かと言えば、反対に必要な割合が高まっていくと思われる。そこで、地域における日常課題に高齢世代がなんでもかんでも新たな環境に対応しなくてもよいように、若い世代の参加ができる仕組みがあれば、高齢世代の負担は大きく軽減されるし高齢世代が持つ知恵や蓄積された情報が発信できる。
　現在の高齢世代は、太平洋戦争後から今日までたゆまない参加と共同で地域社会を築いてきた功績がある反面、伝統的な価値意識を持ち、一つの課題に意見集約がしやすい高齢者だけの集団化しやすいという特徴がある。それは、戦前や戦後の教育体制や伝統的価値観の中で育てられてきた背景が大きく影響していると考えられる。
　そのため、高齢世代が中心のグループや活動が活発と目につきやすいが、高齢世代は意識しなくても、結果的に若者世代からは価値観を押し付けられているといったことから、多世代が参加したグループ活動や団体活動が発展していない現状が散見される。
　しかし、若い世代が中心に行なっている活動では、高齢世代だけでなく、多世代や多国籍での活動も現れている。特に、地球温暖化やマイクロプラスチックといった環境問題では高校生が中心の活動もあり、地域の大人が若い人たちが主体の活動に参加している事例がある。
　高齢世代の持つ知見とリテラシー能力、若い世代が得意分野の情報発信や適応能力といったことを考えれば、地域課題に対応する機能集団ごとに、高齢世代を核として、すべての世代が社会参加しやすい仕組みができれば、今後の生涯学習・社会教育の位置付けが見えてくるのではないだろうか。
　そのためには、公民館は多様な組織との連携や情報交換・発信への仕組み、より高度化する住民の学習要求と協働への取組みに向けた事業化など、組織と職

員体制への強化を必要としていると考えられる。

（２）公民館・職員の力量形成について

公民館職員は、市民の公民館利用者の声を聴き分ける省察する力量形成、それぞれの参加者と力量を繋ぐ取組みの工夫する力、解決能力の高い核となる中心人物を探す役割など、公民館利用者との交流は今以上に深める必要がある。



上記の「国立社会保障・人口問題研究所」のデータでは、今後は少子高齢人口減少社会が加速すると思われる。福生市での町会・自治会への加入率などを勘案し今回の調査結果から類推すると、現状は隣近所での関係は薄く個々人の興味関心に基づいた機能集団ごとに地域コミュニティを形成している、と判断できるのではないだろうか。

しかも人口減少は地方自治体の税収入の減少に向かうことから、予算と計画を前提として行われている自治体が行っているさまざまな地域課題の解決や解消に向けての事業が、自治体だけで担うこと自体が難しくなっている現状がある。そして今後はより拍車がかかり、「予算がないからできません」といった事例が増えることが想定される。

全国的には大都市と東京都のいくつかの区市を除き、人口減少は進展することが想定されている。福生市の場合、当面の間、地域課題を解決・解消するためには、高齢世代を核とした機能集団化した地域住民による、市民参加による対応がベターではないかと考えるが、それには以下の背景と経緯がある。

福生市の場合は、横田基地を通してアメリカ人や他の外国人が普通にみられ、

福生市の人口の６％を超える外国人が生活し、多様な文化が見られるまちである。

昭和 52 年に福生市公民館開館以降、公民館（職員）は公民館での学びと交流を通して、市民の学習要求に応えてきた経験が蓄積している。これまでも、公民館で学習した市民が、さまざまな福生市の審議会などに参加し、力を発揮してきた。

今後は、複雑多岐にわたる地域課題の解決のために、人口比率が高い高齢世代から知見を有する解決能力の高い核となる中心人物を探す役割が必要である。多様な利用者が交流する公民館では、それらの人を探すことが可能である。そのためには、職員は公民館利用者との交流は今以上に深める必要がある。

具体的には、公民館主催事業の参加者のほか、利用者交流会や各公民館の利用者発表会などを通して、地域社会の人材発掘への取組みが必要になると思われる。

さらに、個々人の利用者の声を聴き分ける省察する力量も求められるだろう。そして、高齢世代を核としても次なる世代の参加と協働といった、それぞれの参加者の力量を繋ぐ、取組みの工夫などが求められる。

地域社会の課題解決を担う人材育成そのものが、公民館（職員）の古くて新しい課題であることがわかる。

（３）ICT などへの対応と一定区域内の学習支援の展開

「私的領域の消費的生涯学習カリキュラム」とは異なる、公共課題においては、自治体の枠を超えた連携・協力による事業展開が考えられる

コロナウイルス感染症拡大に伴い、非接触・非対面でインターネットを利用した学習手法が実現し、また急速に拡大した。これまでの公民館では一定区域内（自治体内）の住民を対象に直接対面で学習支援をしてきたが、今後はサイバー空間といった部分での学習支援のあり方について、資料の著作権なども含めて検討する必要がある。

今日の実態として、民間企業では様々な学習機会を「生涯学習カリキュラム」として商品化し、まさしくインターネットを利用して、ビジネスとして広く巧妙に学習（参加）意欲を高めている。

これまでは社会教育法を根拠とし、自治体内の住民のみを対象として学習支援してきた仕組みから、市外からも関心のある公民館事業に参加意欲が伝えられる可能性があるだろう。

これまでの公民館の枠組みでは、自治体を超えた課題を取り組む想定はなか

ったが、インターネットを利用した学習手法の導入や拡大によって、今後の公民館事業の課題となる。

公民館が企画実施する事業について、学習によって生まれる価値（学び合う人間同士の交流によって、協働して課題を解決・解消しようとする新たな価値を生み出す取組み全般）を共有することができ、住民として日常生活の場で自治能力の向上に向けた行動をしていくのであれば、教育基本法に示す教育の目的に沿う取組みとなる。

その意味では、これまでの「一定区域内の住民」といった枠組みは、今日のインターネット環境前提の社会構造からは、枠が外れた事業の企画実施といったことも当然考えられる。

しかし、地方自治体の予算で行われることが前提なので、その取り組む課題は、「私的領域の消費的生涯学習カリキュラム」とは異なる、公共課題とすべきことは当然である。

また、今後一つの自治体といった枠では取組みができない課題、例えば、多摩川沿いの上流から下流に向けて、自治体の枠を超えて共有する災害時対応課題については、土木や環境の側面からの行政課題だけではなく、社会教育の側面から考える取組みも必要と思われる。

福生市でも令和元年 10 月に来襲した台風 19 号で多摩川沿い住民が、より高い段丘地域へ避難した経験から、避難所での対応を想定した対応能力を向上する学習が必要である。また、平成 23 年３月に発生した東日本大震災において、宮城県内の公民館での事例として、過去の津波の被害の事前学習によって、新たな被害を想定していたことから、震災発生後速やかに新たな避難場所へ逃げることで難を逃れることができた報告がある。

具体的には、事前に被害を想定した災害時対応学習や広域避難での対応方法などについては、これまでの情報や多くの知見を共有化した方が、安全性が高まる。その意味では、近隣市で住民同士の避難場所の設定や情報共有も大きな意味を持つ。

地域という文言が示す内容は課題ごとにその範囲が異なると考えると、今後は課題に応じた学習支援のあり方も、そして支援のあり方も ICT の利用は必然と考える。その意味で、十分な環境整備とそれを駆使して住民の学習支援できる力量形成も、職員に求められるだろう。

（公民館運営審議会委員　伊東　静一）

執筆者一覧

第 26 期 福生市公民館運営審議会委員

（任期　令和３年４月１日～令和５年３月 31 日）

委 員 長	石　井　和　夫
副委員長	富　田　久美子
委　　員	山　岸　史　子
	渡　部　綾　子
	三　浦　理　恵
	石　川　慶　子
	中　村　瑞　穂
	伊　東　静　一
	三　浦　佳　江
	末　木　瑞　枝

資　料

資料１　人生 100 年時代における公民館の役割について（諮問）

写し

福教公発第 58 号
令和４年７月 21 日

福生市公民館運営審議会委員長
石井　和夫　様

福生市公民館
館長　佐藤　克年

人生 100 年時代における公民館の役割について（諮問）

福生市公民館は、昭和 52 年に公民館本館、昭和 54 年に松林分館、昭和 55 年に白梅分館が開館し、市民のだれもがつどい、生涯を通じて学び合える場としてその機能を果たしてきました。

その後、40 年以上が経過し、利用者層や活動内容も変化してきており、利用者の学習ニーズに合わせた公民館の役割を捉えなおす必要があります。

現在、人生 100 年時代を迎えており、一般的なライフステージから、一人ひとりが違った過ごし方を見出すマルチステージ化へと社会情勢が変化しつつあります。また、少子高齢化や地域社会とのつながりの希薄化など、多くの社会課題も生じています。

このことに伴い、現在の利用者ならびに公民館が抱える課題と求められる役割を把握し、今後の公民館の役割を模索することが求められています。

つきましては、人生 100 年時代における公民館の役割について御意見を賜りたく次の事項につき諮問いたします。

１　人生 100 年時代における公民館の役割について

２　答申の時期
　令和５年２月

資料２　答申作成にかかる活動記録

日　　時	内　　容
令和４年７月 21 日	定例会 ・諮問「人生 100 年時代における公民館の役割について」を受ける ・アンケート内容の検討
令和４年８月１日～ ８月 31 日	・公民館利用者に対するアンケート調査
令和４年８月 18 日	定例会 ・執筆に向けたスケジュール等の検討
令和４年９月 15 日	定例会 ・アンケート集計結果の概要
令和４年 10 月 20 日	定例会 ・公民館利用者アンケート調査の集計結果に対する現状分析と課題の明確化等
令和４年 11 月 17 日	定例会 ・公民館利用者アンケート結果概要の確認
令和４年 12 月 15 日	定例会 ・答申（素案）作成に向けた内容の確認
令和５年１月 19 日	定例会 ・答申（素案）の確認
令和５年２月 16 日	定例会 ・答申提出

資料３　答申作成のためのアンケート（調査票）

公民館利用サークルへのアンケート調査のお願い

福生市公民館運営審議会では、令和４年７月 21 日付け「人生 100 年時代における公民館の役割について（諮問）」を福生市公民館長より諮問を受けました。

コロナ禍により、これまでの公民館の利用方法が変化するとともに、今後の少子高齢人口減社会、人生 100 年時代のマルチステージ化に向けて、新たな公民館の機能と役割を検討し、社会教育の位置づけや事業と学習支援の方向性を見据える必要があります。

そのため、現在、公民館を利用されている皆さまにアンケートにより利用の実態を伺い、今後の公民館の礎を築きたいと考えていますので、ご協力をお願いいたします。

（※アンケートは、全部で４ページです。）

回収したアンケートは、答申作成の参考とさせていただく予定です。わからないところや記入したくない部分は、空白でも結構です。

サークル活動などで公民館を利用した際に記入し、公民館職員にお渡しいただければ幸いです。なお、記述された内容や個人情報など、プライバシーには万全な対応で取組みます。ご協力をお願いいたします。

提出期限	８月 31 日（水）まで
問合せ・提出先	公民館公民館係（☎042-552-2118） 公民館松林分館（☎042-552-3624） 公民館白梅分館（☎042-553-3454）

１　あなたのことを伺います（それぞれ１つだけ○をつけてください）

性別は：①男性　②女性　③その他　④答えたくない

年齢は：①10 歳代　②20 歳代　③30 歳代　④40 歳代　⑤50 歳代　⑥60 歳代
⑦70 歳代　⑧80 歳代　⑨90 歳代

お住まいは：①市内（町会名：　　）　②市外（　　区・市・町・村）

２　あなたがサークル活動に利用している公民館は、どこですか（１つだけ○をつけてください）

①本館　②松林分館　③白梅分館

３　あなたの参加しているサークルは、どのような活動内容ですか（１つだけ○をつけてください）

①ダンス　②スポーツ　③レクリエーション　④健康維持　⑤音楽　⑥演劇
⑦舞踊　⑧書道　⑨絵画　⑩工芸　⑪語学　⑫文学
⑬地域学習　⑭家政一般　⑮保育　⑯その他（　　）

４　あなたが参加しているサークルは、誕生してからどのくらいの年数ですか（１つだけ○をつけてください）

①１年以内　②１～３年　③３～５年　④５年～10 年　⑤10 年以上

５　あなた自身の参加年数はどのくらいですか（１つだけ○をつけてください）

①１年以内　②１～３年　③３～５年　④５年～10 年　⑤10 年以上

6　あなた自身の公民館利用のきっかけを教えてください（1つだけ◯をつけてください）

①話し相手や仲間がほしかった
②関心をもっていた公民館主催事業に参加したこと
③同じ趣味・活動仲間との会合の場として利用
④公民館に行けば何かあると思った　　⑤たまたま友人に誘われた

7　あなたがサークル活動を継続的に行っている理由は何ですか（2つまで選択可）

①仲間との語らいが楽しいから
②自分らしくいられる場だから
③自分に技能や知識が身につくから
④サークル活動を通して、人や地域への関係が深まったり広がったりするから
⑤自分の能力が認められて、社会貢献している充実感があるから

8 あなたの日常生活にとって、サークル活動はどのくらい大切ですか（2つまで選択可）

①なくてはならない
②やや重要
③そうでもない
④ほとんど関係ない
⑤体調は万全ではない部分はあるが、できるだけ参加するようにしている

9　サークル活動が楽しいと感じるのは、どのような場面ですか（1つだけ◯をつけてください）

①仲間と一緒に話しをしているとき
②新たな知識の獲得や新たな気づきをしたとき
③仲間と真剣な学習や、練習・創作のとき
④制作しているものが完成したとき
⑤仲間と一緒の発表の場にいるとき

10 あなたが参加しているサークルの魅力を、以下から選択してください（1つだけ◯をつけてください）

①指導者やリーダー、仲間がすばらしい
②自分に関心のある身近な自然環境等を対象としている
③福生の課題解決に参加しているという意識が持てる
④趣味として無理なく続けられる
⑤健康維持ができる
⑥学ぶということに工夫がある
⑦とにかく楽しく孤立感がない

コロナ禍以降のことについて伺います

11 コロナ禍前と現在ではサークル活動の内容や方法が変わりましたか？（1つだけ〇をつけてください）

①変わらない　②ほとんど変わらない　③少し変わった　④大きく変わった

12 11の設問で「①変わらない」「②ほとんど変わらない」を選んだ方に伺います（1つだけ〇をつけてください）

①元々、活動内容がサークル単位としたものではない
②個別的な創作活動が中心
③他人との交流を必要としていない
④活動場所が野外中心で他人とは非接触が多い
⑤その他（　　）

13 11の設問で「③少し変わった」「④大きく変わった」を選んだ方に伺います。変わった内容はどのようなことでしょうか。（1つだけ〇をつけてください）

①メンバーと会えなくなったので活動を中止していたが、ようやく再開された
②メンバーの中で、やめてしまった人がいる
③対面・集合型のスタイルだけではなく、インターネット利用を始めた
④サークル活動の様子を、インターネットを利用して情報発信するようになった

14 コロナ禍の中、公民館利用で困ったことはありましたか（1つだけ〇をつけてください）

①声を出して動く・歌う・おしゃべり・仲間との飲食ができなくなった
②出かける場がなくなってしまい、今では出るのが億劫になってしまった
③インターネット利用始めたら、便利さを感じ、出かけなくなった
④職員や仲間と会えず、会話もできず寂しい。
⑤公民館での活動が定期的な生活リズムであったので、体調が崩れた
⑥出かけなくなって、公民館が発行している紙の情報が入手できなくなった
⑦学びができなくなって、不安になった。孤立感も感じた
⑧その他（　　）

15 コロナ禍を経験したうえで、今何を、どのように学びたいですか（いくつでも）

①現在の趣味や学習を続けたい
②新たな趣味や仲間を増やしたい
③コロナ禍で人と話をすることがあらためて重要だと感じたので、新たな人と出会う機会に参加したい
④自宅にいる時間が増え、健康問題・体調管理について関心が増えた。ひとりでは不安なので、仲間と一緒に学び始めたい
⑤自然災害や今後の孤立に備え、自ら社会的な役割を担い貢献できる取組みを学び、新たな人間関係と安心できる関係の中で暮らせる、日常生活を作っていきたい

⑥やはり、対面での学びや話し合う場と機会が欲しい
⑦今後の健康や暮らしの不安を感じ、年金や感染症対策、ロボットや IT を含むこれからの社会と暮らしについて学びたい
⑧多摩地域の低山歩き、多摩川や近くの雑木林など、感染リスクの低い野外での企画をしてほしい
⑨コロナ禍を災害として考え、各自が新たな災害対策を学ばなければと思う
⑩コロナ禍では若い世代も高齢世代も「孤立」が目立ったので、今後、孤立しないような新たな学びの機会や出会いの場が欲しい
⑪この数年、子どもや女性特有の貧困問題が明らかになり、自分自身の学びの広がりも必要と思うので、今日の生活を見直す機会が欲しい
⑫その他（　　）

16 今後の公民館に期待する役割を伺います（いくつでも）

①いつでも誰でも立ち寄れ、賑わいを感じられる場づくり
②初めて公民館を利用しようという人への取組みを充実してほしい
③IT を利用した、学びやイベント情報の充実
④マルチステージで対応できる新たな資格取得の機会の充実
⑤趣味を生かした「プロボノ」を目指す取組みなど、今後を見据えた事業展開
⑥若者世代を含む多世代の利用と交流の場になるよう、音楽や映像など、利用者が学習を深められる機器の充実
⑦人生 100 年マルチステージ化に対応できる、住民の学習支援としてハードウエアとソフトウエアの充実
⑧その他（　　）

※プロボノとは、ラテン語の Pro Bono Publico（公共善のために）を語源とする言葉で、社会的・公共的な目的のために、自身が持っている知識やスキルを生かして社会貢献するボランティア活動のことです。

17 講座やイベントなどの情報を、今後どのような方法で入手したいですか（1つだけ◯をつけてください）

①広報ふっさ
②公民館ふっさや各公民館が発行しているたより
③福生市役所ホームページ
④フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなどの SNS
⑤職員や友人からの口コミ
⑥公民館や町会の掲示板などに貼られているポスターやチラシ
⑦その他（　　）

アンケートは以上です。　ご協力ありがとうございました。

福生市公民館運営審議会 令和４年度答申
「人生 100 年時代における公民館の役割について」
令和５年２月　発行

発行者 ： 福生市公民館運営審議会
連絡先 ： 福生市公民館
〒197-0024　東京都福生市牛浜 163 番地　さくら会館内
電話　０４２－５５２－２１１８